

古井由吉の文章（小説部門課題，以後A）にしろ，小沼丹のエッセイ（評論・エッセイ部門課題，以後B）にしろ，きわめて難解かつ高度な文体と内容を備えており，まさに翻訳者の真の実力が試される格好の課題文だったと考える。課題文Aは，私自身なんども熟読せざるをえなかったほど，時制，ナレーション，いずれもきわめて入り組んだ文体で書かれている。他方，課題文Bは，卓越した着想とユーモアに満ち，Aと比較してより読みやすいが，時代的雰囲気，頻出する動植物名など，日本文化の深い部分への理解を要求するテキストであることは間違いなく，別の意味でAに優るとも劣らない難度を備えていた。いずれにせよ，課題文のコンビネーションとしては申し分なかったと思う。

個別の審査にあたって，私の評価が二転三転した事実を率直に申し述べなくてはならない。課題文AとBのそれぞれに平均した実力を発揮した応募者もいれば，AとBとの間に若干偏りがあった応募者もいる。選考結果について述べると，今回の受賞者全員に対する審査委員四名の評価がほぼ一致したことは驚くべきことである。私自身は，当初，アンナ・グビンスカヤさんの流麗な訳に魅了され，第一位に推すつもりでいたが，審査の過程で若干意見が変わった。シェプキン・ワシーリーさんの翻訳を第一候補に考えた段階もあるが，課題文AB間のバランスの悪さが気になり，最優秀賞，優秀賞への推薦を諦めざるをえなかった。最終的には，総合的な見地から，ヴェラ・ヴァリエヴァさんを第一位に推した。ただし，最優秀賞を受賞されたエカテリーナ・コヴァリョーヴァさんやマリア・プロホロワさんとの間に，決定的といえる大きな差異は見られないというのが率直な感想である。付言すれば，コヴァリョーヴァさんの翻訳は，ABともバランスがとれ，その注の付け方も含めて翻訳者としての誠実さを感じた。その意味でも将来さらに伸びる素質を備えた方だという印象をもった。

奨励に値する作品として選出されたグビンスカヤさんについて改めてひと言述べておく。当初，私は，この応募作品の評価をめぐって審査委員会の意見が割れるのではないかと考えた。事実，私が，高く評価したリズム感，端正さ，プロフェッショナルな流麗さについては，これを必ずしも高く評価しない意見もあって結果としては奨励作品となった。流麗さの点で，Aのリズムをよく伝えてはいるものの，逆にリズムへのこだわりが細部のディテールの再現に結びつかないという側面があった。総じて，予備審査を通過した応募者全員が，それなりに内容をかみ砕き，それぞれに個性あふれる文体で翻訳されたことに対し，心から驚きを禁じ得なかった。時には，**bookish**（ブッキッシュ）に過ぎたり，直訳が目立ったり，全体のリズム感を欠いたりという側面もあったが，課題文次第では，それぞれがまた別の可能性を発揮したかもしれない。いずれにしても，ロシアにおける日本語受容のレベルの高さを改めて知らされた思いである。

亀山郁夫